バカとバスケと召喚獣

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとバスケと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ５２３９Ｙ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
「明久。一緒に小学校に行かないか？」突然の雄二の一言。最初は「雄二。さすがにロリコンはマズイと思うよ」と思った明久であったが、雄二と翔子の小学校の頃の先生の頼みで、小学校の女子バスケ部のコーチを頼まれるが……

第1話　小学生たちとの出会い（前書き）

というわけで、活動報告で伝えたとおり、バカとバスケを全部消し、新しく書くことにしました。ちなみにとある理由で姫路と美波の二人は全然出ません。

第1話　小学生たちとの出会い

その出会いは雄二の一言からであった。

「明久。少し頼みたいことがあるんだ。」

「ん？どうしたの雄二？」

休日のある日、明久の家に遊びに来ていた雄二が突然頼みごとをしだしてきた。明久はどうせ、またくだらないものだと思っていたが……

「明日の放課後、一緒に小学校に行かないか？」

「……」

雄二の突然の発言を聞いて、明久は携帯に手を伸ばし……

「あ、もしもし、霧島さん。雄二がロリコンに……」

「待ってくれ、明久。誤解だ！」

「霧島さん。今すぐ来てくれるって」

明久がとてもいい笑顔で言うと、雄二は明久の胸ぐらを掴み、

「お前、頼むからそういうことは……」

ピンポーン

突然呼び鈴が鳴り出した瞬間、雄二の体は凍りついた。

「霧島さん、来たみたいだね」

「くそ、明久。この恨みは忘れないからな」

「……雄二。小学生に恋するのは良くない。」

黒いオーラを出した霧島さんが雄二の顔を掴んで言った。それから数十分後僕の部屋は赤い血で染まるのであった。

雄二が蘇生し終わり、事情を聞くことにした僕。ちなみに霧島さんも一緒にいた。

「たくっ、明久のせいでひどい目にあったぜ。」

「いやだって、いきなりあんなことを言われたら誰だってそう思うよ」

「……吉井の言うとおり。」

「だからってな。まぁいい。実はな俺と翔子の小学校の頃の担任から連絡あってな。いまその担任の知り合いがいる慧心っていう学校

でバスケのコーチを頼まれたんだ。」

「バスケの？でも、雄二って有段者とかじゃないよね。なのにどうしてそんなこと頼まれたの？」

僕がそう聞くと雄二は何故か渋い顔をしていた。すると雄二の隣に座っていた霧島さんが代わりに答えてくれた。

「……その私たちの担任の知り合い、美星っていうんだけど、その人の甥っ子さんにもコーチを頼んだんだけど、その人だけじゃちょっと手が足りないから……」

「ようするにだ。俺たちはその手伝いをするということだ。俺と翔子は小学校の時に世話になったから手伝うことにしたんだが、折角だから明久たちにも手伝ってもらおうかと思ってな。」

雄二が笑顔でそう言っていたけど、僕は雄二に耳打ちをした。

「それで、実際は？」

「翔子と一緒にいたら命がいくらあっても足りないからな。明久たちも巻き込んでしまえって思ったんだ。」

雄二、そこまで霧島さんと二人っきりになるのが嫌なんだ。でも、バスケか。少し面白そうだからコーチやってみようかな。

「僕はいいよ。秀吉やムッツリーニにも頼もうよ。それに姫路さんや美波にも」

「秀吉とムッツリーニは既に頼んだ。二人も最初、俺のことをロリ

コン扱いしてたけどな。姫路と島田は放課後ちょっと残れないらしいから参加しないってよ。」

「そっか、とりあえずそのコーチしに行くのはいつくらいなの？」

「今週の月・水・金だ。学校終わったらその甥っ子と途中合流して、小学校に行く。」

「うん、分かったよ。」

こうして僕らはバスケのコーチをすることとなった。

そして次の日の放課後、雄二と霧島さんの担任の知り合いの甥っ子との待ち合わせ場所に来た僕ら、そこで待っていたのは……

「あっ、どうも、初めまして。長谷川昴です。って明久」

「甥っ子って昴だったの？」

僕の顔を見て驚く昴。僕も結構驚いていた。するとどういう関係か気になっていた女の子にしか見えない男の子、木下秀吉が聞いてきた。

「明久よ。そっちの甥っ子とお主はどういう関係なんじゃ？」

「うん、僕の家の近所に住んでいる人だよ。」

「それにしても、ミホ姉からコーチの手伝いのする奴が来てくれるって聞いたけど、まさか明久だったとはな。」

「まぁ、本来は雄二が頼まれたんだけどね。」

僕と昴の二人がそんなことを話していると、雄二がバス停の前で大声で呼んでいた。

「おーい、早く行くぞ。バスに乗り遅れるぞ」

「遅刻したら洒落にならないね。早く行こう。昴」

「あぁ、そうだな。」

久しぶりにあった昴だけど、何だか様子がおかしい感じがした。一体どうしたんだろう？この間会ったときは凄くバスケに燃えてたけど……

バスに乗ってしばらくし、目的地である慧心学園にたどり着いた僕ら、そして学園の門をくぐり、体育館の扉の前に来ていたけど……

「なぁ、明久。」

「何？昴？」

後ろにいた昴が何かを聞いてきた。それは……

「あそこのカメラ持ってる奴。大量に鼻血出してるけど、大丈夫なのか？」

昴が言っていた人物はムッツリーニだった。本名は土屋康太。通称『寡黙なる性職者』色々と盗……撮影や盗……録音機器の機械などにも詳しく、さらにはエ、保健体育に詳しかったりするけど、本人はそれを認めていなかったりする。ちなみに実際のエロいことに対して免疫がなく、鼻血を出していたりする。

「まぁ、昴もそのうち、なれるよ。」

「あんまり慣れたくないけどな」

「ほら、無駄な話してないで、早く入ろうぜ」

雄二がそう言って、とりあえず僕らは体育館の扉を開いた。その先には……

「「「「「お帰りなさいませ、ご主人様&お嬢様！」」」」」

「「「「えっ？」」」」

「ぎゃあああああああ！」

「……目の毒」

扉を開けた先にはメイド服を来た五人の少女たちだった。そしてその瞬間、霧島さんが雄二の目を潰していた。

第1話　小学生たちとの出会い（後書き）

とりあえず、姫路さんと美波の二人は原作三巻の話で登場させるつもりです。次回はまぁ、自己紹介話になりますね。

第2話　初日からドタバタ騒ぎ（前書き）

まぁ、今回は自己紹介回になります。

第2話　初日からドタバタ騒ぎ

体育館に入った瞬間に、メイド服の少女が5人待っていた。ちなみに雄二は霧島さんに目を潰されて、凄く痛そうにしていた。

「あの、あの人、大丈夫なんですか？隣の黒髪の人に目潰しされていたような……」

するとピンク髪の女の子が雄二の事を心配そうに聞いてきた。まぁ、確かに僕らの場合は日常茶飯事だから慣れてるけど、この子達の場合はちょっと刺激ありすぎだよね。

「大丈夫だよ。雄二はああいう風にやられるの慣れてるから」

「え、あの、」

「とりあえず自己紹介でもしよっか。」

「はぁ、」

まだ納得行ってないみたいだけど、このままこの子が雄二の心配してると……

「雄二、何、小学生に心配かけてるの？」

「待て、翔子。首を……」

死ぬ可能性が高くなるからね。

とりあえずお互いの自己紹介をすることとなった僕ら、まずは女バスメンバーから

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆でーす」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉…です」

「ひなた、袴田ひなた」

「せーの…」

「「「「「よろしくお願いします！ご主人様。お嬢様」」」」」

五人が礼儀正しく礼をしていた。でも、少し気になることがあった。

「あの、そのご主人様はちょっと……」

「うん、さすがにバスケのコーチなのにそれは……」

僕と昴の二人がそう言うと、真帆ちゃんがむくれて、

「えぇー、いいと思ったんだけどな。」

「それじゃあ、お兄ちゃんで」

まぁ、まだそっちの方がマシな気がするからいいか。とりあえず、僕らも自己紹介しなきゃ、

「えっと、それじゃあ、俺からだな。俺は長谷川昴。知ってると思うけど、ミホ姉……美星先生の甥っ子だよ。」

昴くんは普通に自己紹介してた。お次は僕だな。

「僕は吉井明久。よろしくね。」

至って普通の自己紹介をしたけど……

「ね、あの人バカっぽくない？」

「ダメよ、真帆。あんまりそんな事言っちゃ」

「おー、バカっぽいお兄ちゃん」

真帆ちゃんの一言で、何だか僕の心がすごく傷ついたよ。あれ？何だか涙が……気のせいだよね。

「まぁ、明久よ。小学生にバカ呼ばわりされて泣くんじゃない。次はわしじゃな。わしは木下秀吉じゃ。」

「ねぇ何であの人、女性なのに男物の制服来てるの？」

「きっと男に生まれたくて男の制服を着ているんだよ」

「いや、ワシは……」

「ほら、自分のことをワシと言ってるしね」

「そこは関係ないと思うのじゃが……」

またまた真帆ちゃんの一言から始まった。でも、しょうがないよね。秀吉はどっからどう見ても男には見えないからね。」

「明久よ。お主、何かおかしな事を考えてないか？」

「気のせいだよ。秀吉。秀吉は小学生でも女の子にしか見えないって思われてもしょうがないって、思ってないよ。」

「やっぱり、おかしな事を考えていたではないか。」

次はムッツリーニの番だけど……

「なぁ、明久。さっきからあそこで写真撮ってるけど、犯罪にならないのか？」

昴はそう言うと、僕は昴が見つめる方を見るとムッツリーニは智花ちゃんたちのメイド服を熱心に撮影してる。

「……これで需要が……」

「ムッツリーニ。それ、一応言っておくけど、犯罪だからね。」

僕が写真を撮っているムッツリーニ言うと、ムッツリーニは思いっきり首を横に振る。

「おもいっきり否定してるが、みんなにバレバレだからな」

「……これ口止め料」

ムッツリーニはそう言って、昴くんに一枚の写真を渡した。その写真に映っていたのは……着替え中の女子高生の写真。

「これ、盗撮だろ！！というか、口止め料って」

「あの、何の写真なんですか？」

智花ちゃんが昴が持っていた写真を見ようとしたけど、昴くんが一瞬の内にその写真をビリビリに破り、ゴミ箱に捨てた。まぁ、あんなの見たら卒倒しちゃうよね。

「とりあえず、見た通りだけど、さっき写真取ってたのは土屋康太っていうんだ。」

「……よろしく。」

あとは残っているのは雄二と霧島さんだ。

「次は俺だな。坂本雄二だ。俺たちは長谷川のコーチの手伝いとして来てるからよろしくな。それで、こっちは……」

「……霧島翔子。雄二とは婚約者」

「「「「「えええーーーーーーーーーーー」」」」

「高校生って凄いんですね。」

「お、大人だぁーーー」

「それに婚約者って、もしかしてけ、結婚間近ってことですか？」

「す、すごいです。」

智花ちゃん、真帆ちゃん、紗季ちゃん、愛莉ちゃんの四人は雄二と霧島さんの関係について凄く盛り上がっていた。その問題の二人はと言うと……

「翔子！小学生に嘘を吹きこむな」

「……嘘じゃない。ちゃんと婚約届用意してあるから……」

「あれは、お前が勝手に……」

雄二と霧島さんのやり取りをじっと見ている僕と昴と秀吉（ムッツリーニは写真撮影）。するとひなたちゃんが僕らにあることを聞いてきた。

「おー？お兄ちゃん。馬鹿なお兄ちゃん。おねにいちゃん。こんにゃくしゃって何？」

「こんにゃくしゃじゃなくって、婚約者だよ。ひなたちゃん。とりあえず簡単に言うとね。近い内に結婚する二人のことだよ。」

「おー、そうなの？じゃあ、おっきいお兄ちゃんと綺麗なおねえちゃんは結婚する？」

「あはは、そんなことしたら、多分怖い集団に雄二がボコられたりするね。」

僕がひなたちゃんにそんなことを言っているなか、昴と秀吉は……

「なんか、明久の学校って怖いところなのか？怖い集団にボコられるって……」

「それより、袴田のおねにいちゃん。絶対言いづらいじゃろ」

そんなこんなで、お互いの自己紹介を終える僕らだった。

とりあえず昴は智花ちゃんたちにメイド服から着替えるようにっていい、智花ちゃん達が体操服に着替えて、僕らの前に来た。

「「「「「おまたせしましたー」」」」」

「それじゃあ、みんな始めようか」

「「「「「よろしくお願いしまーす」」」」」

昴の号令でバスケの練習を始めるのであった。基本的には昴が指導とかして、僕らは智花ちゃんたちと一緒に参加したり、個人レッスンをしたりしていた。ちなみに個人レッスンの相手は

智花ちゃん&秀吉ペア

真帆ちゃん&僕ペア

紗季ちゃん&霧島さんペア

ひなたちゃん&ムッツリーニペア

愛莉ちゃん&雄二ペア

でやることとなった。それにしても、ムッツリーニ、ひなたちゃんに教えてるのはいいけど何だかたまに隠し撮りしてるのは……

そんなことを心のなかで突っ込みを入れていると真帆ちゃんがあることを聞いてきた。

「ねぇねぇ、あっきー？」

「あっきー？あぁ、あだ名？何？真帆ちゃん」

「さっき、すばるんに言われたんだけど、おふぇんすって何？」

「オフェンスっていうのは攻撃のことだよ。ディフェンスは守り」
「おぉ、バカそうに見えて意外と知ってるんだね。あっきーは」
真帆ちゃん、結構一言が多いよ。それに……
「馬鹿な。明久がオフェンスの事を知っているだと」
雄二も僕の事をどれだけ馬鹿にしてるのさ。それぐらい知ってるからね。
とりあえず練習を続けていると、雄二が愛莉ちゃんにあることを言った。
「そういえば、香椎は背が高いからディフェンスの方が向いてるんじゃないのか？」
「「「「あ！」」」」
「えぐ…ふえええええん！」
雄二の一言で愛莉ちゃんが突然泣き出した。僕らは愛莉ちゃんを泣かした雄二を思いっきり避難した。
「雄二、何言ったか知らないけど、土下座しなきゃ」
「小学生を泣かせるのはいかんと思うぞ」
「……いじめかっこわるい」

「雄二、小学生泣かしちゃ、駄目」

「待て、翔子。俺も原因が……って、そっちに腕はまがら……ぎゃあああああああああああ！」

霧島さんに折檻を受けている雄二。昴も心配そうに愛莉ちゃんを見ていると、智花ちゃんが……

「あの、長谷川さん。吉井さん。愛莉、身長がコンプレックスなんです。背のことといわれるとあんな感じに……」

「どうすればいいんだ？」

「とりあえず誕生日のことを言えば……」

「よし、昴。早く愛莉ちゃんを落ち着かせよう……ってムッツリーニ？」

気がつくとムッツリーニが愛莉ちゃんに何か言っていた。すると愛莉ちゃんは直ぐに泣き止んだ。

「ムッツリーニ？愛莉ちゃんに何言ったのかな？」

「小学生のうちは背が伸びやすいからしょうがない。だが、直ぐに縮む。って言ってましたよ。」

紗季ちゃんがムッツリーニが愛莉ちゃんに言った言葉を教えてくれた。ムッツリーニ、意外とやるかも……

その後、愛莉ちゃんが僕らにいきなり泣いたことを謝ってきたけど、僕らは気にしてないよって答えた。それに、原因の雄二は責任持って折檻受けてるし、

とりあえず雄二が復活し終わり、練習を続けているなか、僕はフッと智花ちゃんのシュートを見た。智花ちゃんのシュートは見事にゴールに入ったけど、それだけじゃない。シュートスタイルがとても綺麗で……見とれてしまった。そのことを昴に言うと……

「智花は確か経験者って聞いたけど、あれは凄いな」

「うん、凄く綺麗だったよね。」

僕らはそのことで盛り上がるのであった。

その後、練習も終わり、昴の従兄妹の美星先生の車で昴と一緒に送ってもらうのであった。

「いやぁ、悪いね。まさかこんなに多くなるとは思ってなかったけど、」

「たくっ、ミホ姉。確認しないから」

「僕も雄二に頼まれたときはあんまり乗り気じゃなかったけど、ちょっとコーチやる気が出てきましたよ。」

「おっ、そっちのバカそうな奴は真面目だな。なぁ、昴。」

バカそうってひどい言われようなんだけど……

「でも、三日の約束だろ。」

「雄二も三日だけって言ってたけど、僕は続けてもいいと思う。」

僕がそういうと昴は何故か浮かない顔をしていた。一体どうしたんだろう？とりあえず雄二に三日だけじゃなくって、これからも続けようって相談しようと僕は思ったのだった。

第2話　初日からドタバタ騒ぎ（後書き）

やっぱり雄二がひどい目に……まぁ、姫路さんと美波がいないせいで明久は結構ひどい目にあわないからですけどね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5239y/

バカとバスケと召喚獣

2011年11月16日11時09分発行